

栗原裕一郎『盗作』の文学史』は、書名のとおり「文芸作品をめぐって起こった盗作事件の収集と分析と検証を自指した」

一冊であり、「明治の近代文学黎明期から最近の事件まで、できうるかぎり発掘し取り上げている」ものだから、厚いこと厚いこと。四百九十六ページもある大部だ。

といつても、小難しい学術書ではない。

まえがきで著者自身が「あたかも『研究』であるかのようだけれど、そんな高邁な理想や理念のもとで一連の作業がなされたわけではない」と断っているように、盗作というものの自体が「他人の作ったものを失敬した」というだけのことであって、そもそも「深み」だの「奥行き」だのが期待されるテーマではなく、盗作事件が「調べれば調べるほど、どれもこれもたいていしよぼくてせこくて、ときに笑ってしまうほど情けない」類のものなのである。スキヤンダラスな興味もあいまって、読み始めたら止まらない。しかも、そのしよぼさが盗作という行為そのものにだけ依るのではなく、「事件を語る言葉の貧しさ、報道す

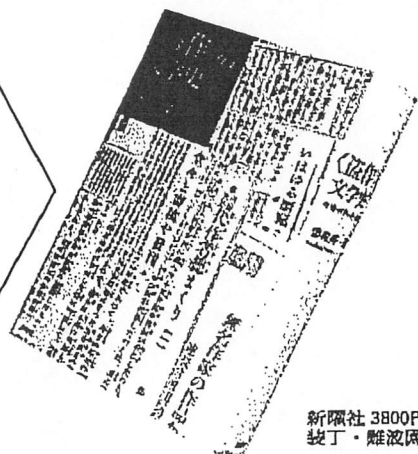
るマス・メディアの姿勢からもたらされる印象」があるという。

たとえば「メディアの事件としての盗作疑惑」と題された第一章で発掘される盗作疑惑は、倉橋由美子の「暗い旅」と庄司薫の「赤頭中ちゃん気をつけて」の二作で、「暗い旅」はビュートルの「心変わり」、

「赤頭中ちゃん」はサリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」の盗作?としてメディア

アが煩り立てる過程が検証されていくのだが、疑惑を報道するのはもっぱら新聞と週刊誌で、文芸誌は概ね黙殺。週刊誌も出版社系はものよって煽ったり沈黙したりという構図が浮き彫りになるのには、思わず苦笑い。つまり盗作事件の顛末を事細かにレポートすることで、同時に卓抜なメディア論を展開しているのだ。

さらに第二章では石原慎太郎（この都知事兼作家の盗作疑惑も出てくる）の出現により新人賞が一攫千金の手段となった時代の背景を、第三章では小説が映画化、ドラマ化されるようになった時代を風刺しているが、中でも三度の盗作疑惑に見舞われた（引き起こした？）山崎豊子の第二の事件をめぐる分析には納得。「不毛地帯」の盗作事件は、朝日対文春の図式、そしてシベリア抑留者の中での対立、左右両翼、瀬島龍三の影など、様々な社会的要因によって煽られていたというのだ。昨年の六月刊行の本で、いまさら取り上げるのもなんだが、「噂の真相」を愛読していた人にはたまらない面白さ。おすすめの一冊である。（浜）



新隆社 3800円  
装丁・難波岡子